



山岳部創部 75 周年記念特集号



2021 年 11 月 6 日 プレ冬合宿 立山雄山東尾根にて西田（左）と竹之下（右）（撮影：藤井良太）

目次

- | | |
|---------------------------|-----|
| 1. 山岳部創部 75 周年記念シンポジウムの案内 | …2 |
| 2. 記念シンポジウム講演要旨 | …3 |
| 3. 山旅自然のフォトコンテスト 2022 | …14 |
| 4. 現役近況報告 新入部員紹介（深澤 蓮） | …15 |
| 5. 現役近況報告（竹之下昇・田中文菜） | …16 |
| 6. 写真で綴る山岳部の歴史（事務局：高岸） | …20 |

山岳部創部 75 周年記念シンポジウムの案内

京都府立大学山岳部創部 75 周年記念シンポジウム



日時 2022年11月5日(土) 12:45~16:45 (開場 12:00)

場所 京都府立京都学・歴史館 (小ホール) 及びオンライン配信

参加 事前申込制、参加費無料

基調講演

土壌学における SDGs 最前線

中尾淳 (山岳部顧問)

農学博士

京都府立大学

生命環境科学研究科

土壌学研究室准教授



特別講演

山村の変化が示唆する未来

小林正秀

農学博士

京都府

森林技術センター

主任研究員



「山から学ぶこと SDGs」 OB 講演

【森林の持続的な経営管理】

○佐藤肇 (1987 年卒)

地域から信頼される国有林

○中村琢磨 (2006 年卒)

大学演習林の技術職員という仕事

【パートナーシップ】

○竹中雅幸 (2013 年卒)

奈良県川上村を拠点に四季折々の自然を安全に案内する登山ガイド

○壽榮松孝介 (2014 年卒)

日本で一番人気の山「高尾山」でホテルマネージャー

○中西博己 (2002 年卒)

シンガポール拠点から世界のエネルギー需給をささえる

【技術革新】

○高岸且 (1990 年卒)

空間情報技術の最前線

○下西勲 (1992 年卒)

下町工場の金型マイスター

【カーボンニュートラル】

○藤井良太 (2011 年卒)

カーボンニュートラルの社会を担う

○西上真司 (2016 年卒)

最もエコな船舶で物流動脈を支える

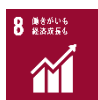
【人材育成】

○鶴飼一博 (1995 年卒)

次世代林業担い手の育成

○富澤隆一郎 (1999 年卒)

東京 2020 後のスポーツクライミング人材育成



主催 京都府立大学山岳会 (山岳部創部 75 周年記念事業実行委員会)

後援 京都府立大学同窓会、京都府立大学鴨漂会 (WV 部 OB 会)

協力 京都府立大学ワンダーフォーゲル部、森なかま、写真部

申し込み京都府立大学山岳会

<https://kpuaa.jimdofree.com/>



記念シンポジウム講演要旨

基調講演「土壌学における SDGs 最前線」 中尾 淳

山岳部顧問 京都府立大学 生命環境科学研究科土壌学研究室

1. 土壌とは何か



土壌とは、風化・崩壊した岩石に動植物遺体などの有機物が加わり、地形や気候、生物などの作用をうけて時間をかけて生成したものです。世界平均で約 20 cm と薄い層であるものの生命基盤として重要であることから「地球の皮膚」とも呼ばれます。土壌の生成は、およそ 6 億年前、生命の陸上進出を契機に始まったとされています。独立栄養生物が光合成により体内につくる有機化合物は、やがて分解されほとんど二酸化炭素となる一方で、一部は腐植と呼ばれる茶褐色の物質として地表に残り、砂や粘土などの鉱物をつなぐ働きをします。このつながりがあることで、バラバラだった鉱物粒子は多孔質な集合体すなわち土壌となります。つまり土壌は無機物と有機物の相互作用

を必要とする自然体であるため、生命活動の無い環境では生まれません。その観点に立つと、月の砂（レゴリス）は厳密には土壌ではないと言えるでしょう。

2. 土壌のはたらき

日本のように高温多湿な環境では、地表はほぼ草木で覆われてしまい、土壌は露出しません。また農業人口は現在 2% を切っており、土地を耕す過程で土壌に触れる人もまたわずかです。そのため、日本人の土壌への関心は非常に薄く、土壌が我々に提供しているサービスの重要性に対して無自覚です。しかし土壌は、植物生育および作物生産を支える（生産機能）だけでなく、保水・透水を制御することで水資源の管理を容易にする機能や、汚染物質を分解・吸着し作物や水を汚染から防ぐ浄化機能、炭素を貯留し温暖化を緩和する機能などを備えています。特に近年深刻化する気候変動の緩和に向け、土壌の炭素貯留源としての機能には高い関心が寄せられており、2015 年にパリで開催された第 21 回気候変動枠組条約締約国会議（COP21）では、温室効果ガス排出量を相殺する手段として、土壌有機炭素を増加させる取り組みが提案されました。また、ムーンショット型研究開発事業では土壌微生物を利用した温室効果ガス削減の取り組みが進められています。

3. 世界の現状と土壌の危機

土壌の機能を生かす取り組みの一方で、世界中で土壌の劣化が進んでいます。化学肥料と農薬に依存した近代農業は土壌有機物の減耗や微生物多様性の減少を引き起こし、水利確保のための巨大ダム建設は下流域のかんがい水不足や養分の減少を招いています。また、鉱山廃水中の重金属や原発事故に伴う放射性物質による土壌汚染もまた、土壌の資源価値を大きく低下させます。しかも世界に分布する既存の耕作地は都市との競合によって面積を減少させているため、これまで未開発であった自然環境の耕地化が進んでいます。農業生産と自然環境保全のバランスは非常に難しい課題ですが、猶予は残されていません。

4. 土壌と SDGs

持続可能な開発目標（SDGs）17 項目の中で、少なくとも 2（飢餓をゼロに）、6（安全な水とトイレを世界中に）、13（気候変動に具体的な対策を）、15（陸の豊かさを守ろう）の達成には土壌機能の保全が不可欠です。目標達成期限は 2030 年度ですが、これは通過点にすぎません。空気や水と比べ見過ごされがちですが、土壌もまた自然環境に属する社会的共通資本（コモンズ）です。限られた集団のみが土壌の恩恵を受けてないか、我々の世代の過剰消費が将来世代の損害につながっていないか、研究者だけでなく様々なステークホルダーによる議論や検証、そして改善に向けた具体的な行動が必要です。



気候変動緩和の秘策？

特別講演 「山村の変化が示唆する未来」 小林正秀



所属：京都府森林技術センター主任研究員

経歴：1966 年生まれ、京都府出身。

南丹市美山町で生まれ、山で野遊びに親しむ幼少期を過ごす。

京都府立大学農学部林学科卒業後、京都府林業試験場に就職。

2006～2014 年、府立大学院の特別講師として招かれ、論文の指導をしながら現場で学生達とナラ枯れ防除にも取り組む。

ナラ枯れやマツ枯れ、獣害、竹林の拡大、休耕田の拡大など『過疎が招いた山村の疲弊の解消』に一貫した研究と徹底した現場活動に取り組む。

農学博士。日本森林学会、日本応用動物昆虫学会会員

私は、日本の原風景が見られる地域として人気になっている南丹市美山町で生まれ育ちました。実家は築 200 年を過ぎた茅葺民家で、重要文化財に指定されています。実家の庭には大きくて美しいモミジがあり、木に関わる仕事がしたいと願って、京都府立大学林学科に入学しました。学生時代は山岳部には所属しませんでした。社会人の山岳会（関西岩峰会）に所属（現在も所属）して登山も経験しています。卒業後、実家から 20km ほどの場所にある京都府林業試験場に勤務しました。実家が大規模な栗農家であったこともあり、丹波栗を研究対象にしました。京都府産丹波栗は、日本最古のブランド品で、これと肩を並べるブランド品は、世界にもボルドーワインとイベリコ豚くらいしかないと思います。栗はホモサピエンスだけでなく、虫や獣にとっても魅力的な食料です。このため虫害や獣害を受けることも多く、虫や獣も研究対象としてきました。

1980 年代後半以降、地球温暖化が顕在化し、栗は凍害（春先の高温によって栗の木が水を揚げ、その水が凍って起こる被害）を受けるようになりました。マツ枯れという樹木の伝染病も拡大しました。そして、1990 年代になって、丹後半島でナラ枯れが拡大、どんどん南下して 2005 年頃からは京都市市街地でも発生するようになりました。「社寺仏閣、公園の貴重木を守って欲しい」との要請が強くなり、栗の研究を一旦中止して、ナラ枯れの原因解明と防除法の開発に取り組みました。森林簿を一人で電算化したプログラミング技術、大木を伐採して搬出できる体力、生物（植物、虫、菌類）の飼育や同定も得意でした。その上、現場が近く、手伝ってくれる方も多く、ナラ枯れでは多くの研究成果をあげることができました。ナラ枯れの媒介昆虫であるカシノナガキクイムシを飼育することにも成功し、材内での驚くべき生態を解明しました（本講演では動画で紹介する予定）。こうした研究成果によって、2005 年、京都府立大学から博士号を授与されました。2008 年からは京都府立大学の特別講師として、研究室の学生や「森なかま」と協働し、下鴨神社や建勲神社などのナラ枯れ防除に奔走しました。ペットボトルで作ったカシノナガキクイムシの捕獲装置が一世を風靡し、テレビや新聞で大きく報道されました。また、こうした活動で得た人脈を活かして、栗の氷蔵処理を普及したり、鳥獣撃退器も開発しました。本講演では、美山町という山村の風景の変化（竹林の拡大、マツ枯れ、ナラ枯れ、獣害）を概観し、こうした問題が世界で同時多発している要因について考察します。1 時間で、30 年の研究成果を一気に話します。

人が山に登る理由は千差万別ですが、登山家ならば誰も自然を愛で、自然を守りたいと願っているはず。その気持ちがあれば、私の早口にもついてくれるはず。そして、日本人がペットを殺し、家畜を縛り、世界一農薬を使い、世界一食べ物を捨て、世界一若者の自殺率が高くなった要因も見えてくるでしょう。本講演で納得できた内容を多くの方に伝えてください。そすれば、SDGs の達成が、より早くなるでしょう。

山岳部 OB による講演

OB セッションでは 11 名の山岳部 OB に学生当時のアクティビティや現在就いているお仕事の面白さを講演していただきます。

地域から信頼される国有林

佐藤 肇 (1987 年卒)

学生時代の活動

中学時代は陸上の長距離走や峠のサイクリングが趣味でしたが、高校の山岳部で沢登りや雪山の醍醐味を知ってからは、大学でも迷わず山岳部に入りました。在学中の活動は、ゴールデンウィークの剣岳・立山周辺での雪上訓練や山スキー、夏の剣岳でのクライミングや北アルプス縦走、冬の鹿島槍ヶ岳などでの雪稜登山がメインでした。



森林管理署の標準的な仕事としては、谷止め工や山腹工などの治山対策、間伐などの森林整備事業、地域への木材の安定供給等の実施ですが、現職の福岡森林管理署では、これら以外にも、海岸松林の松くい虫被害防除や松林の再生のための事業、市町村や猟友会と連携したニホンジカの捕獲も重要な仕事になっています。いずれも地域住民の生活や地域産業等に深く関わることから大きなやり甲斐を感じています。また、署長としては、特に若手職員に、ドローンを設計業務等に活用するよう指導しています。

現在の仕事の内容

これまでの職歴を振り返ると、他省庁も含め霞ヶ関での勤務と森林管理局や署での現場勤務が半々で、山好きで体力もある私としては、現場勤務において、直接森林施業に関わったり、安全対策や木材の生産性向上技術などを林業事業体に指導したりする方が合っているように思います。

学生さんへのメッセージ

エメラルドグリーンの沢を遡上したり、雪山をスキーで滑降し時には雪洞を掘って泊まったり、青空の下 3000m 級の岩峰でクライミングをしたり、これら山岳部での体験や思い出は、公私において私の原動力となっています。学生の皆さんは、今がチャンスですよ。



三里松原 (福岡県)



松林の再生



大学演習林の技術職員という仕事

中村琢磨 (2006 年卒)

学生時代の活動

私は高校までは溪流釣りや散策がてら山を登ることが趣味でした。山岳部で本格的に山登りを始め、四季を通じて縦走や登攀など経験を積みました。一方、一人で興味のある地域を逍遥するような山登りも始め、屋久島や西表島を歩き回ったりしたことが印象深いです。単独行のリスクはあれど、自然とじっくり向き合う面白さを知りました。

山岳部の現役を離れてから、森林の歴史の研究をテーマとして大学院に進学し学位を得ました。大学院では論理的に課題を究明する方法や考え方、人に説明し理解してもらう技術を学ぶことができました。



現在の仕事の内容

現在は九州大学の演習林で技術職員という職に就いています。日本では森林科学を学ぶ学科がある大学では教育や研究のため演習林という森林を置き、管理することが大学設置基準に定められています。技術職員とは、演習林の森林、林道などの管理とともに、学生実習の補助や内外の研究者への技術的サポート、公開講座など市民教育の補助を行う職種です。このため、技術職員には森林科学の専門的知識とともに、チェンソーや重機を操る現場の技能の双方が求められます。

この仕事の面白いところは植林から伐採収穫にいたるサイクルを自ら計画・実行できる点、また、学生や内外の研究者が森林で行う様々な試験研究に関わることで新しい知見に触れられることです。

学生さんへのメッセージ

大学生という身分は自由に自分の興味のある事に打ち込むことができます。学生の皆さんは、色々な事を見聞きし体験していくことでやりたい事を実現して行ってほしいと願います。山登りにおいて、この岩壁はとても登れそうにないと思っても、よく観察すると登りやすいラインが見つかることがあります。何事も正面突破だけが正しいわけではなく、諦めずに考え続けることが大切だという事を山から教わりました。



冬の実習の様子 地図読みと山歩きを学ぶ

奈良県川上村を拠点に四季折々の自然を安全に案内する登山ガイド 竹中雅幸 (2013 年卒)

学生時代の活動

学生時代は縦走登山が好きで、大学 5 年目の夏 (2012 年) に日本海～日本アルプス～太平洋を 46 日間で単独縦走したことが思い出深いです。次は山々をどんどん通り過ぎていくのではなく、一箇所に留まって季節の



変化を見ていくようなことがしたいと思ったことが現在の山暮らしに繋がっています。

現在の仕事内容

大学卒業後、在学中からアルバイトしていたツアー登山の会社に就職しました。しかし都会でのサラリーマン生活があまり向いていないと感じたことから、奈良県川上村という山村へ地域おこ

し協力隊という移住促進制度を利用して移住し、そこで出会った仲間と地域密着型のエコツアー事業を立ち上げました。具体的には登山、カヤック、ケイビング（洞窟探検）等です。現在は独立し、個人事業主として一年を通してガイド業で生計をたてています。

川上村は吉野林業発祥の地として知られており、山で仕事をするといえば基本的に林業であって、ただ山を案内して飯が食えるのかといった声も当初はありました。私はただピークハントするだけ、遊ぶだけといった形ではなく、自然体験を通してその土地のことを伝えるエコツアーリズムの考え方を基盤にしています。山村における新しい山仕事のあり方として、地域に根付いたガイド

が増えて欲しいと思っています。

学生の皆さんへのメッセージ

やりたいと思ったことを突き詰めることが次のステップへの手掛かりになると思います。就職や移住など、将来に不安を覚えた場面は正直数多くありますが、これが何になるのかといった実利の部分は一旦置いて、自分が興味をもてることを諦めないことが未来に繋がっていくと感じています。山岳部なら納得できるまで思いっきり山に登って欲しいですし、他の部や活動でも同じことが言えると思います。



日本海～太平洋縦走のひとコマ



ケイビングガイドの研修で訪れた
沖永良部島（鹿児島県）の洞窟

日本で一番人気の山「高尾山」でホテルマネージャー 壽榮松孝介（2014年卒）

学生時代の活動

大学入学までは比叡山くらいしか登ったことがなかったのですが、大きな山や冬山登山に憧れ、山岳部に入部しました。2年生の際に南米最高峰・アコンカグアに先輩二人と登頂しましたが、その後は逆に日本の山の魅力を再発見し、藪山登山や沢登りなどの泥臭い登山にハマっていきます。



現在の仕事内容

そんな原体験を経たからか、仕事場も山の近くを好み、現在は東京・高尾山の麓にある活動拠点「タカオネ」のマネージャーとして、施設運営に



現役当時、沢登りに携わっています。タカオネはホテル、カフェ、ストア、焚き火場、ワーケーションスペースなどを持つ複合施設で、地域のプレイヤー・リソースと連携して「登るだけではない山の楽しみ方」を発信する拠点です。2021年7月にオープンし、地

元の電鉄会社である京王電鉄とともに、地域の賑わい創出に取り組んでいます。タカオネでは、地元の間伐材を使った焚き火を楽しめるサービスを展開したり、地域のクリエイターの作品を購入できるストアを運営したり、地域の中でのいい循環とビジネスを繋げるようなモデルづくりに励んでいます。

一口に「SDGs」と言っても、様々な切り口・捉え方がありますが、誰かが無理をしたり、我慢の上に成り立つ施策は持続的ではないですし、楽しさやワクワクの先にこそ持続性があるのでは、と私は考えています。高尾山という、街・東京の終わりであり、森・山の始まりである場所性を活かし、社会に対してどのようなインパクトが与えられるか、日々模索中です。



タカオネで焚き火



<https://takaone.jp/hotel/>

シンガポール拠点から世界のエネルギー需給をささえる 中西博己 (2002 年卒)

学生時代の活動

学生時は季節を問わず縦走や登攀をしていました。



現在の仕事内容

今はプラント設備診断の仕事をしています。登山とプラント設備には関連がなさそうですが、共通点があります。それは本質的に危険なものを扱うという点です。プラント設備は可燃性、爆発性、毒性物質を高温・高圧にて扱うことがあり、本質的に危険です。

登山もその特性上、転倒や滑落、雪崩や溺れによる窒息、悪天候による身体へのダメージ（低体温症、熱中症）、危険な動植物との接触に身体を晒すという点で本質的に危険です。しかし危険を避けるだけでは、目的のものが得られません。プラントは製品を作れず、登山者は山に登れません。

プラント設備の安全操業においては、目的をスポイルしない ALARP (As low as reasonably



現役当時 冬季の登攀

practicable)の原則に基づいた、リスク管理が行われます。ハインリッヒの法則（1件の重大事故には 29 件の軽微事故と 300 件のニアミスがある）に基づくニアミスの収集と分析、タスク細分化による危険要因抽出、安全対策、結果共有がなされます。安全対策には上位～下位ヒエラルキーがあり、上位はリスク排除と置き換え、中位はリスク隔離、下位は作業手順見直しや訓練、保護具使用が該当します。発生事故に対しては FTA(Fault tree analysis)等による根本原因分析が行われます。最も大切なのはリスクに対しメンバーが同じ目線を持ち、共有することです。

学生の皆さんへのメッセージ

登山でも活動ごとの危険要因抽出と対策、ヒヤリハットの収集分析と状況に応じた安全対策、FTA が有効ですが、メンバー間の共通認識と情報共有は必須です。リスクと危険に対する処置を行い、メンバーと目的を達成できた時の嬉しさが挑戦的登山の醍醐味の一つでしょう。学生の皆さんにはリスク管理法を学び実践共有し、リスクコントロールされた登山を願います。



石油プラント

空間情報技術の最前線

高岸 且 (1990 年卒)

学生時代の活動

山岳部には入学式よりも前に入部することから始まり、5 年間で岩と雪、緑の山々の中で学生生活を存分に謳歌しました。府大山岳部への



入部理由には「なんで山登るねん (OB 高田直樹氏の著書)」の影響も大きかったです。4 年時には休学し、1988 年 8 月に日本山岳会の天山山脈登山隊に参加し、未踏峰「雪蓮峰 (6627m)」に挑戦しました。その後、中国から中近東や欧州を廻りました。

5 年時には、国内で冬期末踏であった黒部渓谷から白馬岳に突き上げる名剣尾根の清水岳(しょうずだけ)にて天候悪化で行動不能となり 1990 年 1 月に部員 7 名がヘリコプターで全員救出されました。その際は大学や富山県警、長野県警等



未踏峰「雪蓮峰」標高 5500m 付近

多くの関係者にご迷惑をかけることとなり反省しています。

現在の仕事内容

航空測量会社 (パスコ) にてリモートセンシング技術で森林資源を管理する業務に従事しています。

リモートセンシング技術とは、遠隔から地球を観測し、都市や森林等の国土の状態や変化を把握し、課題解決のための分析や対策を実施することができる技術です。主に人工衛星や航空機、ドローンや移動計測車などを用います。

私が従事する森林管理の分野では、航空レーザ計測システムでスギやヒノキ等の樹木を樹高や位置、材積を解析します。森林計測学の様々な研究が生かされ、実用化されるようになりました。

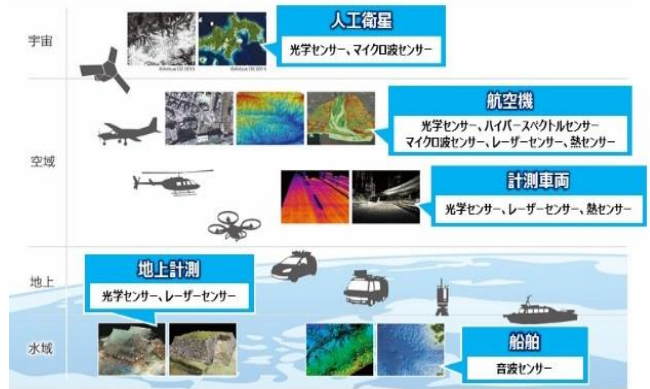
現在の日本の森林は、戦後に植林された人工林が豊富な蓄積量となり、本格的な利用期にきています。また、森林整備によって国土の保全や地球温暖化の防止のための二酸化炭素の吸収源としても重要な役割を担っています。技術開発を発展させるため、京都府大森林計画学研究室と株式会社パスコでは 2015 年から森林情報 3 次元技術の高度化の共同研究を進めています。

学生の皆さんへのメッセージ

「パイオニアワークとは何か」は、本多勝一氏の

「創造的な登山（パイオニアワーク）と何か」は 1955 年に京大山岳部報告にかかれたものです。企業が成長するために、常に必要されることは、ビジネス領域の新規開拓であり、パイオニアワークの連続です。よく仕事に行き詰ったには、山岳部で苦難した場面を振り返り、山岳部の先輩から叱咤されたたり、激励されたことを思い出すことが多いです。学生時代は如何に困難な課題に取り組むことができるかが重要と考えます。山岳部はパイオニアワークを考えることができる選択肢の一つです。

人工衛星・航空機・ドローン・計測車両・船舶などの多彩なプラットフォームに最先端の光・レーザー・マイクロ波・熱・音波などのセンサーを搭載



リモートセンシング技術の概念図（出典:パスコ）

下町工場の金型マイスター

下西 勲 (1992 年卒)

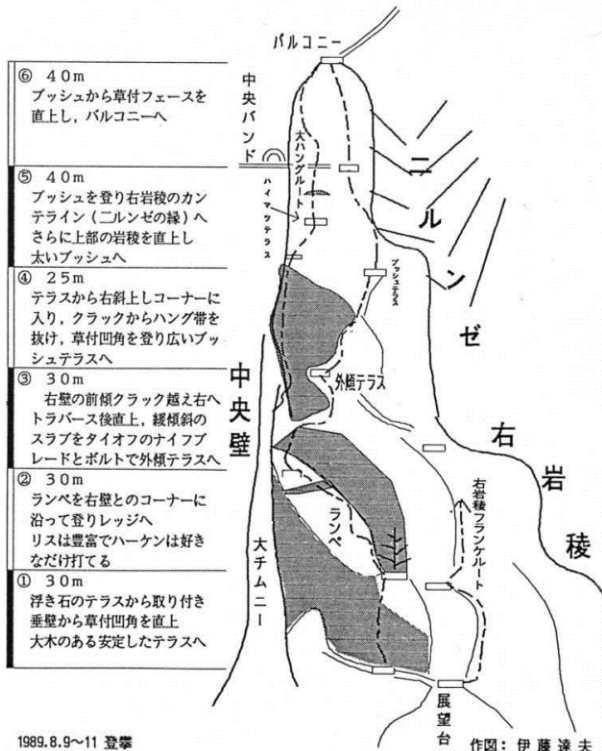
学生時代の活動

学生時分は年を通してオールラウンドに行動できる登山を目標に岩登り、沢登りそしてスキー縦走、積雪期登攀等を学び実践しました。中でもこだわったのが富山



県黒部エリアでのルート開拓でした。比良の天狗岩に足繁く通り、少しかぶった岩壁を利用しハーケンやアングル、リングボルトを使った人工登攀、そして装備、食料等の重い荷物の荷揚げの練習を思い出します。ルート開拓を通して、登攀ギアの肩掛けベルトや、ハング帯のルート工作用に体を安定させるアジャスト機能の付いたブランコを作るなど色々なオリジナルの道具を作りました。そのことが今の仕事である“ものづくり”の始まりで有ったかもしれません。

黒部・丸山東壁 右岩稜「京都府立大学ルート」



オリジナルの道具で難ルートを開拓

現在の仕事内容

金属プレス加工用の金型を設計製作する会社を営んでいます。金型の製作はやってみないと解らない要素が多分にあります。また同じ金型を製作することがほとんど無い為製作する度にトライ&エラーを繰り返しながら製作することが多いです。絡まった糸を解きほぐす様と表現する



池永精機株式会社 HP から

のですが、問題点が色々な所に潜んでいて解決するためには粘り強く仕事と向き合う必要があります。この粘り強さこそが登山で培った体力や精神力が生かされているように思います。また、仕事が集中し納期が重なった場面では、社員達にひたすら一歩ずつ前に向かって歩くようにと登山を模した表現で指南することもあります。

学生の皆さんへのメッセージ

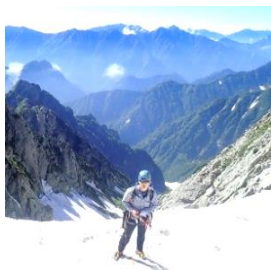
弊社岡山工場（倉敷市真備町）が 2018 年西日本豪雨災害で河川氾濫により被災した際、4mの水没でメインの数値制御の工作機械がすべて使えなくなり工場閉鎖も頭をよぎりましたが、その極難を乗り切れたのも、社員の協力も多大にありましたが、登山で得た体力や精神力によるものだと思います。

カーボンニュートラルの社会を担う

藤井良太（2011 年卒）

学生時代の活動

カーボンニュートラルは、現在、世界の気候変動対策の考え方として注目されています。私が大学に入学した 2006 年は、京都議定書が発効された翌年でした。当時の私は次世代産業としての森林について学ぼうと、年間百日以上も各地の山に通い、自然の観察の仕方やその中での歩行技術、生活技術、林業技術を学びました。



現役当時、後立山連峰爺ヶ岳にて

山岳部で経験した山の生活は、わずかな燃料や電池を使う他は、空調も冷蔵庫も電車もない稀有な体験の場です。その結果、生活でエネルギーの恩恵がどれだけ大切かを体験することができます。同時に、化石燃料に依存しない社会を創るためには、私たちの力で社会システムや常識を次世代にシフトしていく必要があります。

そのようなパラダイムシフトへ貢献したい思い、私は今の会社で仕事を始めました。

現在の仕事内容

再生可能エネルギーを主電源とする社会は、技術的にはもうすぐ近くまで来ています。あとは政策の舵をきり、蓄電や水素燃料などの新技術を含めたカーボンニュートラルの方向に集中投資することが社会の課題解決に貢献できる手段と考えます。一方、モニタリングによる定量的な収支把握が必須です。現制度の見直しや再評価もまた重要です。二酸化炭素吸収源の森林を切り拓いてメガソーラーが設置されている奥山の実態、メンテナンス不良による故障、自然災害による劣化や破損、廃棄物などの対策も課題です。

私は主に太陽光発電システムの発電量計測や故障検知に関わる計測器の開発・保守、発電機や蓄電システムの新機種通信対応を業務としてい



太陽光発電システムのメンテナンス

ます。現在の発電量を把握することでシステムの劣化状況や売電量の情報を Web で集めやすくし、再エネ事業に貢献しています。カーボンニュートラルの実現には、多くの地域で発電量と消費量をトータルでゼロにすることが重要です。

全国の発電所に出張して、エネルギーの作り方は本当に地域によって多種多様だという事を実感します。各地の風土・自然環境をよく知り、自然の法則に従って計画・運用をすることがとても大事です。それは登山にも共通しており、日射、風向・風力、雨水の流れ、そして現在位置の地形

を把握する事は、山での行動判断の原点になっています。沢登りでの焚き火は、バイオマス使った次世代でも優れた創エネの手法です。海に囲まれた山国の日本の特性に合わせて、高効率太陽光パネルの市街地への設置、風力やマイクロ水力発電、他にも船で電気輸送を行う事業なども活発化していきます。今後のエネルギー政策や技術革新にも関心を持って、自分の電力の購入先を選んでいきたいものです。

最もエコな船舶で物流動脈を支える

西上真司 (2016 年卒)

現在の仕事内容

私は卒業後、海運会社に就職し船員となりました。内航海運業や船員の仕事について簡単に紹介させていただきます。



この仕事の最大の特徴は約 3 ヶ月の乗船勤務と約 1 ヶ月の長期休暇という点です。私は当時奨学金を借りており、卒業後になるべく早く返済したいと考えていました。そんな時に偶然船の仕事の存在を知り、乗船中は基本的にほとんどお金を使うことがなく、経験を積んで資格を取れば船舶関係の仕事では潰しが効きやすい、長期休暇があるので山や釣りに行くにも最適だと考え、意外と地味な理由で船に乗ることに決めました。

船の仕事は主に港から港へと荷物を運ぶことです。具体的には着離岸、航行、見張り、荷物の積み下ろし作業、積荷の管理、船体設備の点検整備、燃料や水の補給、食料等の積み込み、清掃や衛生管理、賄い作業など多岐に渡ります。私は甲板部なので、荷役や航海に関する事、船体整備等が主な仕事です。船舶輸送の最大の利点は一度に大量の荷物を運ぶことができるという点です。例えば大型の内航タンカーは一度に約 5000KL を運ぶことができますが、タンクローリーの場合 20KL ほどしか運ぶことができません。効率も

もちろん、環境負荷という意味でも無視できないものがあります。

逆に最大の欠点は時間がかかるという点です。単に輸送時間という意味と、船は新造船後 20 年以上使うことも多く、設備面や労働環境はもちろん、さらには考え方といった部分まで、時間に合わせて新しいものを導入する、変化するといったことに時間がかかる傾向にあります。



海に虹がさす

次世代林業担い手の育成

鵜飼一博 (1995 年卒)

学生時代の活動

思い出深い山行は、黒部川上廊下遡行 (1989 年)、白山スキーツアー (1991 年)、黒部丸山東壁～劔岳源次郎尾根 (1991 年)、爺ヶ岳主稜～赤沢岳北西尾根～黒部川～真砂岳～室堂 (1992 年) などがあります。



まで刈り込まれた南アルプスのお花畑の復元や回復のための作業を行いつつ観察を続けています。

学生へのメッセージ

虫の目、鳥の目、魚の目を養えるよう、授業はもちろんのほか、サークル活動やアルバイト、旅行の時間も大切に学生生活を満喫してください。



完全装備でチェーンソーを持つ

現在の仕事内容

1995 年に静岡県職員 (林業職) として入庁し、主に森林土木分野に従事。2020 年からは静岡県立農林環境専門職大学短期大学の教員として、将来のフォレストワーカーや森林施業プランナーを育成するため、伐木造材技術や測量技術等を教えています。研究としては、ニホンジカの採食圧によりゴルフ場のグリーンと見間違ふほど

東京 2020 後のスポーツクライミング人材育成

富澤隆一郎 (1999 年卒)

学生時代の活動

私が学生の頃にやっていた山登りは、週末は関西の岩場で、連休や夏・冬の長期休みは北アルプスの岩壁で、クライミングをすることが多かったです。縦走や沢登り、山スキー、アイスクライミングなども、幅広く活動していました。それは OB 諸氏に幅広くご指導頂いたお陰です。3 回生時には 1 年間休学し、海外でキャンプしながら知り合ったクライマーと登る生活を送りました。



Dフェイス4ピッチ目で確保する富澤

現役当時の登攀の様子

をしながら国内外で登る生活を数年送りました。これらの活動を通じて得た経験や技術が現在の仕事に繋がっています。

私は現在、病院で理学療法士・アスレティックトレーナーとして患者様のリハビリテーションに従事しながら、クライミング協会でもコーチとし

現在の仕事内容

大学卒業後はクライミング施設を運営する会社に就職し、スクールやルートセットなどの仕事



クライミングのチームとともに五輪メダリストのタレント発掘・育成に携わっています。また、大学で非常勤講師としてクライミングの普及活動を行っています。よってここ数年、平日は病院勤務・大学授業、週末はタレント

発掘・育成で全国各地を飛び回りつつ、時々日本代表チームの海外遠征にも帯同といった具合です。大学院博士課程で傷害予防の研究もしていますがあまり進められていません。

学生へのメッセージ

府大の学生さんには学生時代に夢中になれるものを見つけて欲しいです。そして、まずはチャレンジしてみましょう。うまくいかなければ先生、先輩に聞いて工夫するのです。チャレンジの積み重ねが人間を成長させます。自分にとっては山登りがそれにあたります。

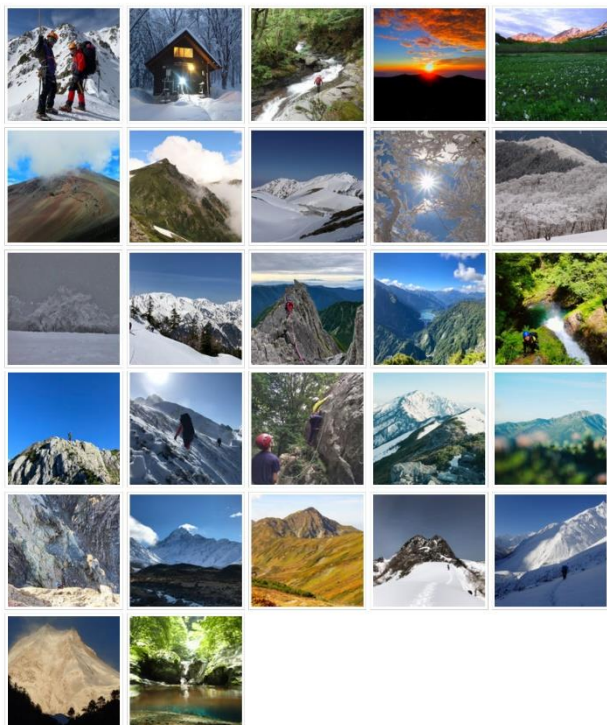
府大はチャレンジへのサポートが整っている大学です。学生時代に様々なことを経験し、社会で活躍できる人間力を育てて欲しいです。

山・旅・自然のフォトコンテスト

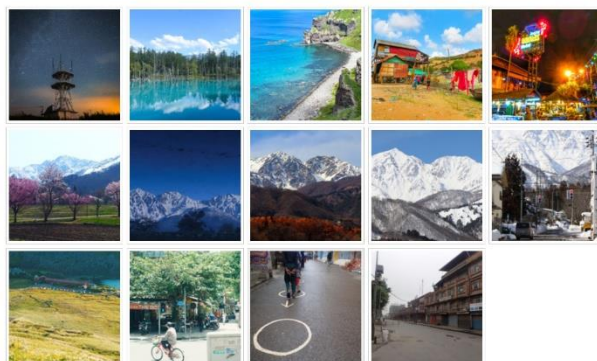
山岳部 75 周年記念イベントの一環として、府立大学写真部の協力を得て一般参加型のフォトコンテストを共催で開催しています。2022 年 8 月 15 日~10 月 10 日までに、山岳部門 27 作品、旅行部門 14 作品、動植物部門 11 作品の合計 52 作品の応募がありました。事務局にて 21 作品を選定し、府大 1 号館ロビーにパネル展を行い、人気投票で優秀作品が決定します。

応募された作品の一覧

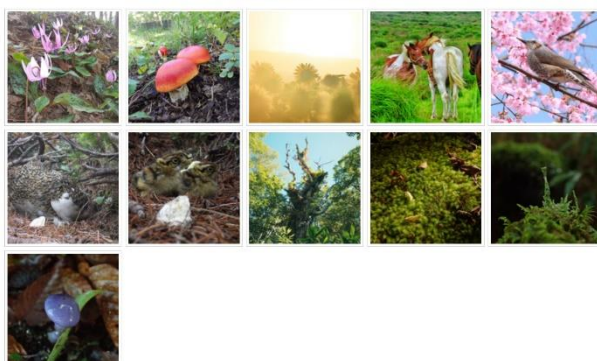
応募作品集 山岳部門



応募写真集 旅行部門



応募写真集 動植物部門



現役近況報告

新入部員紹介 深澤 蓮(福祉社会学科 1 回生)



高校時代、10月の白馬岳登山で

京都府立大学山岳会の皆さま、初めまして。今年度より京都府立大学山岳部に入部させていただきました、公共政策学部福祉社会学科1回生の深澤蓮(ふかさわれん)と申します。同大学のワンダーフォーゲル部と兼部しています。私は静岡県富士宮市の柚野地区という自然に囲まれた小さな地域で生まれ育ち、幼いころから自然に親しんできました。友達と夏は川、冬は山に遊びに行ったり、父と山に入り狩猟やハチミツの採集について教わったりしていました。

登山を始めたきっかけは、出身高校である静岡県立静岡高等学校で山岳部に入ったことです。幼いころからの友達が登山をしていて影響されたことや、自然がいっぱいの場所にもっと行ってみたいという理由で山岳部に入りました。高校時代は県内の低山を中心に登り、瑞牆・金峰山や白馬岳にも登山に行きました。昨年のインターハイでは男子が東海優勝、そして後輩は今年、男子がインターハイ初出場で全国4位、女子が東海2位という輝かしい成績をおさめています。高校時代は悪天候や新型コロナウイルス流行の影響、また自身の怪我や病気により十分に登山が出来ずにいましたが、それでも仲間と一緒に様々な経験を積むことができた高校山岳部時代は、今の私をつくる大切な要素になっています。

大学への入学後は、登山を続けたいという思いでまずワンダーフォーゲル部に入部しました。ワンゲルの活動も楽しいけれど高校よりもレベルアップ

した登山もやってみたいと思っていたところ、先輩方からお声がけをいただいて山岳部にも入部しました。8月の劔岳での合宿は、先輩方、OBの藤井さんにはご迷惑をおかけしてしまいましたが、自分が今までやってきた登山経験を覆すとても良い経験となりました。自分の未熟さを痛感し悔しかった半面、歩くだけではない登山へのモチベーションが上がった山行でした。それまで山は「体力を使う娯楽」程度に考えていましたが、レベルを上げて山を楽しむためには、自分が想像していたよりも様々な要素が必要だと感じました。山岳部ではほかに、沢登りやクライミングの練習に連れて行っていただきました。先輩方と比べたらまだまだですが、高校時代より自分のレベルが上がっていることを実感できて楽しいです。

これからは、まず基盤となる体力や知識、技術力の向上を目指し、今私が山岳部でしている「連れて行ってもらう登山」「教わる登山」から、いずれは「自分が連れていく登山」、「自分が戦力になる登山」ができるよう、大学生のうちに成長したいです。また、今の具体的な目標は、高校時代に部活内外ずっと私を支えてくださった静岡高校山岳部顧問の見原先生を、自分が山行に連れていくことです。たくさんお世話になった先生に自分が成長した姿を見せたいと思っています。最後に、不束者ではありますが、登山力の向上を目指して精進していきますので、京都府立大学山岳会の皆様、これからどうぞよろしく願いいたします。



2022年9月、高校山岳部の同期と穂高縦走

2022 年度 GW 後立山縦走合宿報告

竹之下 昇・田中文菜

GW に後立山縦走合宿行った。当初予定していた鳴沢岳西尾根と下山路の爺ヶ岳東尾根は雪の少なさにより断念したが、全体としては天候にも恵まれ満足のいく山行となった。

1)期間：2022 年 5 月 3 日～5 月 7 日

2)メンバー

CL 竹之下昇 (3)、西田耕己 (3)、田中 (2)

* () 内は回生

1)行程

5 月 3 日

黒部ダム駅 (7:30) - 赤沢岳北西尾取付き (9:15)
- 北西尾根 1935m ピーク後のコル (16:00) (幕営)

5 月 4 日

幕営地 (5:00) - 赤沢岳 (13:10) - 鳴沢岳 (15:30)
- 新越乗越小屋 (17:00) (幕営)

5 月 5 日

幕営地 (5:00) - 岩小屋沢岳 (6:20) - 種池小屋 (8:40)
- 爺ヶ岳南峰 (10:00) - 冷池山荘 (11:30)
- 鹿島槍ヶ岳南峰 (14:40) - 冷池山荘 (16:40) (幕営)

5 月 6 日

幕営地 (5:00) - 爺ヶ岳中峰 (6:40) - 爺ヶ岳南峰 (7:20)
- 爺ヶ岳南尾根 - 扇沢 (12:00)

2)記録

5 月 3 日



2022/5/3 赤沢岳北西尾根側面のルンゼをロープで確保して登る

前日から扇沢で車中泊をして、始発バスで黒部ダム駅に向かう。内蔵助平方面の黒部ダム駅の出口は残雪に覆われていたが、いざ見通しのきく場所へ行くと、雪が少ないことが分かった。とりあえず、黒部ダムの下までとりあえず下ったが、徒渉が困難そうであるという判断で鳴沢西尾根ではなく赤沢岳北西尾根を上ることにした。赤沢岳北西尾根の支尾根間にあるルンゼに雪渓がついており、安定してそうなのでルンゼを詰めて北西尾根上に乗ることにした。ルンゼの最上部は岩がむき出しになっており、5m ほど岩と草付きのミックスの急登を登る必要がありここでロープを出した。竹之下がロープをもって上り安定した場所でビレイポイントを作成し、田中がアッセンダーを使用して登り、西田を確保して登った。しかし、雪渓に上る前にハーネスを履き忘れていたため、スリングで簡易ハーネスをすぐに作ることで対応した。そこからは多少の藪を漕ぎながら高度を上げていった。当初、標高約 1800m 付近のコルが幕営適地だと考えていたが当てが外れた。1791m ピーク付近に幕営適地があったのでそこに戻るか、1935m ピークの先にあるコルに行くかで迷うが、田中に多少の疲れがみられたこともあり、竹之下が



山行エリアの概念図



2022/5/3 ルンゼを詰め赤沢岳北西尾根に乗る

とりあえず偵察に行き、幕営適地があったので携帯電話で 1800m 付近にいる西田と田中に連絡し、竹之下は 1800m 付近にデポした荷物を取りに戻った。竹之下がデポを回収し幕営地に到達したときには西田と田中がすでにテントを設営してくれていた。この日は天気も良く外で調理し、水作りもそとで行った。

5月4日

朝 3 時に起床し 4 時半出発目標で準備するが、結局出発は 5 時になった。前日の反省から出発前にハーネスをつけた。赤沢岳北西尾根の 2000m 付近の急登部分で竹之下が誤って枯れ木を手がかりに登ろうとし、5~10m 程滑落するという事案があった。この時竹之下は足首をひねるだけで済み、その後も痛み止めを飲むことで行動することはできたが、一つ間違えれば、ほかの部員を巻き込んだ事故が起きていた可能性が十分あり、反省すべきことであった。北西尾根 2100m 付近の急登で、滑落した場合ルンゼに落ちそうだったので使用した。また、北西尾根 2400m 付近で岩稜を巻くために隣の尾根に渡る際に、ルンゼを渡る際に滑落のリスクに対して



2022/5/4 赤沢岳北西尾根 2100m 付近
ルンゼをトラバース

使用した。その後は岩稜とハイマツ帯を進み赤沢岳山頂に到達した。ここからは気を付けながらも、少し安心して鳴沢岳に向かった。鳴沢岳では 2009 年の遭難事故への追悼の意を表し、新越乗越小屋に向かった。赤沢岳から新越乗越間は思いのほか時間がかかり、パーティ全体が疲労していることを感じた。この日の幕営地は劔岳が非常にきれいに見えた。

5月5日

幕営地から爺ヶ岳までは残雪がそこそこあったが、爺ヶ岳から冷池山荘まではほぼ夏道で冷池山荘手前の上り斜面から残雪があった。この日は夕方から雨が降る予報であったが、冷池



2022/5/5 鹿島槍ヶ岳山頂にて

山荘に荷物をデポして鹿島槍にアタックする計画であったので、爺ヶ岳から冷池山荘は特別に危険な場所はなかったので、西田が先行してデポが濡れないように、また雨が降ってきてもすぐにテントに入れるようにテントを冷池山荘に設営し、ペースが速くない田中に竹之下がついて西田を追う形をとった。これがうまくいき、ちょうど竹之下と田中が冷池山荘に到達したときにちょうどテントが立っていた。西田によると、すでに整地され場所があったようで、そのまま幕営地として使えるようであった。装備をデポして鹿島槍ヶ岳を目指すが、布引山以降はほぼ夏道であった。布引山付近では冬毛と夏毛の生え代わり途中のライチョウが登山道に出てきておりとてもかわいかった。鹿島槍ヶ岳に登頂後は 20 分ほど竹之下、田中は休憩し西田は写真撮影を楽しんだ。雨が降る予報であったがこの日雨が降ることはなかった。

5月6日

この日は4時30分にはテントを撤収することができた。前日にメンバーで協議の結果、雪の少ない爺ヶ岳東尾根で下山することは困難なため、爺ヶ岳南尾根で扇沢に下山することにし、出発前にモルゲンロートを撮影する時間を設けた。この日の行程で特段危険な場所はないので田中に読図の練習として、扇沢まで案内してもらうことにした。爺ヶ岳南尾根はほぼ夏道だったので間違えるような場所はなかった。扇沢への道路まで下山し、アスファルトの道を歩いていると偶然、京都府立大学ワンダーフォーゲル部のOBの溝に出会った。これには驚いた。



2022/5/6 冷池山荘からのモルゲンルート

3)各メンバーの感想、提言、課題等

(竹之下)

今回の山行は天気恵まれるありがたい山行となった。また、完全に計画通りではなかったが概ね計画を遂行することができたのは良かったと思う。天気が良く僕の好きな剣岳がきれいに見えたこともよかった。

今回は一点重大なヒヤリハットがあったので、この点については十分に反省している。普段は枯れ木など折れるようなものは絶対につかまないように注意しているが、注意が欠落していたようで誤って枯れ木に体重をかけてしまった。今回は私だけの滑落で済んだが場合によってはメンバーを巻き込んでしまう可能性がある滑落であったと思う。第一に滑落しないことであるが、落石ラインや滑落時に巻き込まれるような場所に居ないことも非常に重要だと身をもって感じた。一方で、パーティ全体で意思の疎通がスムーズに行えており、意思決定やロープを出したり

するのが今回は非常にスムーズであった。昨年11月に行った雄山東尾根でのプレ冬合宿ではロープを出すことで大幅な時間のロスとなっていたが、今回はある程度スムーズに行うことができていた。また、テント内での生活も慣れてきたので水づくりや朝の準備が早くなったと思う。

今後についてだが竹之下個人としては鹿島槍ヶ岳東尾根や白馬主稜といったルートに挑戦したいという思いがあり、それに向けて練習していきたい。また、パーティとしての成長としては田中の成長に期待したい。現状ではリーダーとしてパーティを率いる力はまだまだないが、今年1年の間に技術、知識、精神面でリーダーとしての能力を成長させてほしい。

(西田)

感想：今回の山行は全日程で天気に恵まれたのと、メンバー全員が適材適所で協力しあって行えたので、当初の計画とは登山路と、下山路ともに異なったが概ね成功したと個人的には感じています。具体的にはテント生活中で水作りを担当する者。食事を担当する者。設営とその他テント周辺の整備を担当する者と無言のうちに効率よく分担できていたと感じました。その為山行2日目の朝はまだ慣れていなかったのか起床から出発まで2時間程度かかりましたが、泊数を重ねるに連れて早くなり最終日には1時間半ほどにまで短縮できました。また、登山行動中も適宜休憩をとりながらも先頭でルートファインディング、藪漕ぎ、ラッセル等をするメンバーが入れ替わり、赤沢岳北西尾根の標高2100m付近で数カ所ロープを出した際もトップと、ビレーヤーを入れ替えしゃくとり虫の様にして進んで行ったのも効率よく進めた要因だと思います。昨年の立山雄山東尾根で行ったプレ冬合宿の頃と比較すると生活技術や登山が効率的に行えるようになり多少は進歩したのかなと個人的には感じました。

反省：まず自分自身の反省としては日焼けを侮っていた点が挙げられます。日焼け止めクリームを塗るのが面倒であり好きではないので樹林帯を進む1日目と2日目に塗っていなかったのと、リップクリームを持ってきておらず唇が酷く乾燥した状態になったため、その点は今後

反省をして改善して行こうと思います。加えてテント内で生活する際に腰が痛く、あまり協力して作業を行えなかった点が良くなかったと感じています。また、パーティ全体としてはスムーズに概ね予定していた行程を進める事ができ良い山行だったと思います。一点挙げるとすれば赤沢岳北西尾根の2000m付近の急登部分で竹之下が誤って枯れ木を手がかりに登ろうとし、5～10m程滑落してしまうヒヤリハットがありました。幸い下部にあった木の根元付近にひっかかり軽症で済んだため、痛み止めを服用する事でその後も登山を継続する事ができましたが、滑落現場を目の当たりにし自分自身も他人事ではないのだと改めて登山の危険について認識する事ができ良い経験になりました。また、今回はたまたま田中、西田両者とも竹之下の真下についておらず滑落に巻き込まれる事はありませんでしたが、もし巻き込まれていれば大事に至ったかもしれません。やはり前を登っている者の真下には入らない様にする。常に上部から落石や雪崩等が発生していないか注視するなどの事が大切だなと身をもって感じる事ができました。

今後に向けて：登山において竹之下は特にリスク管理とロープワークについて長けていると個人的に感じています。彼からよくロープの扱いについてアドバイスを受けるので自身の至らない点を改めて行き少しずつロープを扱った登山

技術を習得して行きたいです。また田中は悪天候でも、楽しみの少ないハードな行程であっても文句の一つも吐かず黙々と前に進む姿を目にしているのでその点も見習って行きたいと思っています。さらに、自分は国内では東北、北海道方面の山に登った事があまりないため、この夏は東北や北海道の山へ登りたいと考えています。特に初夏の飯豊山を縦走したいです。

(田中)

今回の合宿は、天候にも恵まれ心地よい山行であったが、重大な課題も発見された。

1点目は雪上歩行である。2日目の行動日、テン場を離れてすぐのところで雪の傾斜を10m程滑落した。ピッケルは備えていたが、滑落の動揺により身体を上手く操れず、自力での滑落停止が出来なかった。結果として、細木の多い場所であったから止まることができたが、危ない状況であった。滑落の原因は、斜面に対するアイゼン歩行がなっていないためだと考えている。また、ピッケルで滑落停止出来なかったのも問題だ。改善していきたい。

2点目は読図である。これまでの参考の課題としていつも挙げているが、特に天気図の読みは全く成長していない。自分では危機管理が出来ない状況を早く脱出し、地に足着いた登山がしたい。自主的に座学の時間を設ける必要がある。

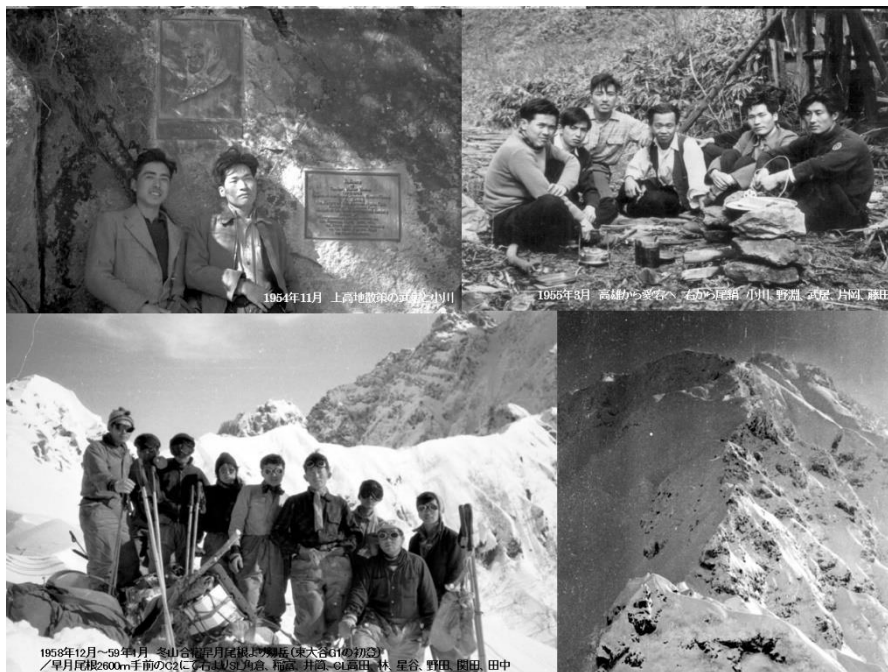


2022年5月5日 鹿島槍ヶ岳山頂から劔岳方面を望む

写真で綴る「山岳部の歴史」

西京大学時代 剣岳東大谷 G1 初登攀に成功

「西京大学」から「京都府立大学」と改称されたのは 1959 年でした。当時の山岳部は芝山君遭難（1957 年 3 月）を乗り越えて、新しい力を発揮していました。写真左下は、剣岳東大谷（ひがしおおたん）G1 の積雪期初登攀（高田ら）に成功した 1958 年 12 月から 59 年 1 月の冬山合宿時の写真です。



山小屋の夢が実現し、「コテージ感覚の山小屋」へ

1960 年に山小屋建設の夢が語られ、建設のための基金募集が開始されました。その 25 年後に山小屋が完成し、1985 年 11 月に山小屋開きが行われました（写真左上）。山小屋ができてからは、毎年のように正月のスキー、ゴールデンウィーク、秋の 3 回は、定期的に利用されて OB と現役部員の交流の場となっています。2015 年からは「コテージ感覚の山小屋」としてリニューアルし山小屋を一般開放しました。現在では山岳部以外の多くの方々にも、山小屋を利用いただけるようになりました。

土地：長野県北安曇郡白馬村大字北城字落倉原 1 4 7 1 8 番乙り
 家屋：木造二階建 41.40 m²

